

【論文】

シャルル・ボヴァリーの罪
—フローベール『ボヴァリー夫人』の日本語訳をめぐって—

澤崎 久木

RÉSUMÉ

La traduction est souvent influencée par la culture d'origine du traducteur. Dans cet article, nous examinons deux « fautes » récurrentes dans les traductions japonaises de *Madame Bovary* de Gustave Flaubert, en comparant une dizaine de traductions, plus une traduction anglaise et une allemande : la première de ces fautes se situe dans la scène des Comices et l'autre dans celle du baptême. Dans cette dernière, la majorité des traducteurs japonais pensent que Charles propose le prénom de sa mère pour le bébé, bien qu'il y ait une autre possibilité : il veut le baptiser Emma. Dans la scène des Comices, une réplique du dialogue entre les amants est attribuée à Emma par la plupart de traducteurs japonais, tandis que les lecteurs français l'attribuent à Rodolphe. La « réponse » d'Emma et le fait de donner le prénom de sa grand-mère à une enfant nous semblent très naturels dans notre contexte culturel. Dans ces deux cas, il ne s'agit pas de fautes grammaticales. Le texte original présente une certaine ambiguïté qui est le résultat du style élaboré de l'écrivain. L'examen des manuscrits nous montre que le romancier, en éliminant les précisions superflues pour purifier ses phrases, nous laisse plusieurs possibilités d'interprétation. Certaines langues, l'anglais ou l'allemand, peuvent conserver cette ambiguïté dans la traduction, mais la langue japonaise, très différente du français nous oblige souvent à choisir l'une de ces possibilités au détriment des autres, malgré notre volonté de rester le plus fidèle au texte. Ainsi les lecteurs japonais conçoivent une image un peu particulière de ce roman.

はじめに

本稿は、フローベール『ボヴァリー夫人』の日本語訳の中で、言語的には誤っていないが、大半の翻訳者がおそらく作家の意図とは異なった解釈をしていると思われる部分2箇所について、日本語訳、他国語の翻訳、フローベールの草稿を検討し論じたものである。前半は、以前に書いたフローベール『ボヴァリー夫人』の日本語訳における間接話法につ

いての小論¹の中ではんの余談的に触れた問題を、その特集号の編集者との議論も踏まえて、改めて再論したものであり、後半は同種の解釈上・翻訳上の問題がある別の部分について論じたものである。

『ボヴァリー夫人』の日本語訳は、1997年までに12人の翻訳者による56版の翻訳がある。² 到底すべての版を入手することはできないので、同じ翻訳者のものは、改訂して全集に入れたり別の出版社から出版したりというもので大差はないと考え、入手できた以下の8人の日本語翻訳に加えて英訳とドイツ語訳ひとつずつを検討した。³

中村星湖訳『世界文学全集 20』1927年、新潮社 [1920]

伊吹武彦訳、岩波書店、1939、1960 改版、岩波文庫、上下巻 [1935]

村上菊一郎訳、角川書店、1966年、角川文庫 [1949]

生島遼一訳、新潮社、1965年、新潮文庫 [1958]

山田齋訳、河井出書房新社、2009年、河出文庫（初版：中央公論社「世界の文学 15」）
[1965]

杉捷夫訳『筑摩世界文学大系 45』筑摩書房、1971年

菅野昭正訳『集英社ギャラリー世界の文学 7 フランス II』集英社、1990年 [1976]

芳川泰久訳、新潮社、新潮文庫、2015年

Gustave Flaubert *Madame Bovary*, translated by Eleanor Marx-Aveling, introduction by George
Saintsbury, « Everyman's Library », Dent, London, 1966 [1928]

Gustave Flaubert *Madame Bovary, Sitten in der Provinz*, Herausgegeben und neu übersetzt von
Elisabeth Edl, DTV, München, 2012

I. エンマの沈黙

最初の例は、第2部第8章、有名な農業共進会の場面である。ボヴァリー夫人とロドルフは二人きりで村役場の二階に陣取って、広場で行われている演説や表彰式を見物している。二人が会うのは二度目で、ロドルフはこの機会にエンマを誘惑しようと考えている。ロドルフがエンマにささやく愛の言葉と、演壇上の演説や表彰式の声と、広場の群衆や家畜のざわめきが多層的に交錯している。少し長いですが、フランス語原文と生島訳を引用しよう。

— Tantôt, par exemple, quand je suis venu chez vous ...

« À M. Bizet, de Quincampoix. »

— Savais-je que je vous accompagnerais ?

« Soixante et dix francs ! »

— Cent fois même j'ai voulu partir, et je vous ai suivie, je suis resté.

« Fumier. »

— Comme je resterais ce soir, demain, les autres jours, toute ma vie !

« À M. Caron, d'Arguil, une médaille d'or ! »

— Car jamais je n'ai trouvé dans la société de personne un charme aussi complet.

« À M. Bain, de Givry-Saint-Martin ! »

— Aussi, moi, j'emporterai votre souvenir.

« Pour un bélier mérinos ... »

— Mais vous m'oublierez, j'aurai passé comme une ombre.

« À M. Belot, de Notre-Dame ... »

— Oh ! non, n'est-ce pas, je serai quelque chose dans votre pensée, dans votre vie ?⁴

「たとえば、さっき私がお宅へ行ったとき ...」

《キャンカンボワ村、ビゼー君に賞として贈られる》

「私はこうしてあなたのお供をするなどとは思っていませんでした」

《七十フラン！》

「百度も私はもう帰ろうと思ったのです。でも、あなたのあとを追って、おそばにいることにしたのです」

《肥料》

「そして今夜も、明日もほかの日も、ずっと一生おそばにいるつもり」

《アルグイユ村、カロン君に、金牌一箇！》

「だっていままでだれといっしょにいてもこれほど完全なよろこびを感じたことはないのですから」

《ジヴリー・サン・マルタン村、パン君！》

「だから私はあなたの思い出をいつまでも心にもって行くつもりです」

《メリノ羊一頭にたいし ...》

「でもあなたはお忘れになりますわ。あたしなど影のように過ぎてしまいます」

《ノートル・ダム村、プロ君に ...》

「けっして。ね、私だって、あなたのお心のなか、あなたの生活のなかでなにかになれないでしょうか？」（生島 pp.182-184）

表彰式の言葉が間に挟まれているので(《...》で囲まれている部分)多少読みにくいですが、特に不自然な感じは受けない。ロドルフの大袈裟な口説き文句に対してエンマが慎ましく、あるいは相手が否定することを期待して、謙遜する。ロドルフは定石通り、それを否定してみせる。下線を引いた部分は、生島以外も大方の日本語翻訳者が、エンマのセリフとして女言葉で訳している。⁵この言葉は、こういう状況にある女性のものとして、心からの謙遜にせよ、礼儀上の形式にせよ、媚態の一種にせよ、きわめて自然に思われる。実際ロドルフは関係を持った後でエンマを捨てる心づもりでいるし、小説の後半では、ロドルフは現にエンマのことをあっさり忘れるのである。それとも、こういう先見の明は世間知らずの若妻としては不自然だろうか。だがエンマは結構な読書家という設定だから、経験がなくてもこの程度のセリフは口にするだろうか…。

前述の『ボヴァリー夫人』の自由間接話法の日本語訳についての小論で、日本語の直接話法の印として、男言葉・女言葉に触れ、この部分を日本の翻訳者の多くが女言葉で訳しているが、「どちらかという」とロドルフの言葉のように思える、と書いたところ、「文脈から当然」ロドルフである、と書き直すよう提案された。そこでその「フローベールと翻訳」特集号の編集をしていたロイク・ヴァンデル氏と電子メールでの議論になった。彼によると、統計を取ったわけではないが、フランス人ならおそらく95%の人が、これはロドルフの言葉だと考えるだろう、文化的コンテクストから、こういう立場の人妻が、誘惑者の言葉に沈黙か拒絶以外で答えるということはある得ない、と言う。「文化的コンテクスト」と言われれば、文化を異にする我々は沈黙するしかないが、しかしそれならば、19世紀のフランス女性は現代のフランス女性とは違ってこういう対応をした、という例がいくつか見つければ、この論拠はくずれることになる。

身近なフランス人に尋ねてみたところ、エンマの言葉ならば、「いいえ」(Mais non, etc.)など、もう一つ要素が必要だ、と言う人、エンマの言葉と解釈できないこともないが、そうするとエンマはロドルフの誘惑を受け入れたことになる、と言う人がいた。

ちなみに、日本人のフローベール研究者十数人に該当部分のフランス語原文を見せて、ロドルフかエンマか尋ねたところ、(母数が少ないので統計的に意味のあることだとは思わないが)エンマと答えた人の方が多数だった。謙遜する女性というのは我々日本人の目にはごく自然なものに映るのだろう。もっとも、原文で読む前に翻訳で読んでいた人も多かったらうから、最初に読んだイメージが刷り込まれていると考えることもできる。

しかし、少数派ながら、これをロドルフの言葉として訳している翻訳者もいる。例えば

新潮文庫の新しい芳川訳は以下のとおりである（表彰式の部分は省略する）。この翻訳では、エンマの自称は平仮名で「わたし」と書いて区別しているのもので、問題の言葉はロドルフのものとして訳されている。山田訳も同様で、中村訳はどちらの言葉とも判別しがたい。⁶

「ですから私は、あなたの思い出を携えて行くことにします」

[…]

「でもあなたは私のことなどお忘れになるでしょう、私など影のように通り過ぎただけなのでしょう」

[…]

「ああ！そんなことはない、ですよ、私だってあなたのお気持ちのなかの、あなたの人生のなかの何かになれるでしょうか」（芳川 p.266）

この訳によると、「私は忘れないが、しかしあなたの方は忘れるだろう」と、謙遜してみせるのはロドルフの方である。だがすぐに自分で自分の言葉を否定して、「あなた」つまりエンマの心の中で「私」ロドルフは、「影のよう」に忘れ去られるわけではなく「何か」にはなれるだろう、と主張するのである。

フローベールはこの農業共進会の章に多くの草稿を残しているが、この部分の推敲の過程を見ると、草稿では、「あなた」vousの強勢形を入れて、「しかしあなたは、あなたの方は、私を忘れるでしょう」« Mais vous, vous m'oubliez » と、ひとつ前の文の「だから私は…」« Aussi moi, … » の強勢形 moi と対応して、「私」（ロドルフ）と「あなた」（エンマ）の対比を強調している。⁷ 単なる「しかし」Maisの代わりに対立を強調する「その一方で」Tandis que を使っている版もある（3-fo184）。この強勢形のvousは何度か書いたり消したりしたのち、自筆最終稿からは消えている。

しかし、ロドルフとエンマの会話が決定稿にあるような形を取る以前の草稿をたどると、「賞（会話を区切る）」« prix (coupant le dialogue) » という言葉が見られ（3-fo162）、その会話は、ある版では以下のようなものになっている。⁸

「あなたはもしかするとスペイン系ですか」

「いいえ、全然。どうしてそんなことをおっしゃるのです」

「お御足の反り方とか、胴回りとか、御髪とかからそう思われます。[…] なんと豊かな髪」とロドルフは言った。「なんとつややかな。[…] それにあなたの眼の色と同じ

です。実に素晴らしい」

「私は青い眼の方が好きです」とエンマは言った。

「ふん、誰もが青い眼をしている」

「それに〈でも〉空の色です。それにことわざをご存知でしょう。緑は地獄に、黒は煉獄に。で、私の眼は黒です。」

「私の眼も黒ならよかった」

「なぜ？」

〈彼はためらった〉〈彼はためらった〉「どうしてそんなことを聞くのです。少なくとも私もあなたと一緒に煉獄までは行けるでしょう。〈あなたから離れずにすむからです〉一緒に苦しみましょう。」

「まあ、ご親切なこと！」彼女は言った。驚いた眼差しには感動の涙が一滴、瞳の笑いを和らげていた。

表彰式の声が割って入るのは、ロドルフのモノログではなく二人の「会話」であって、これらの草稿の中ではエンマは沈黙も拒絶もせず尋常に対応しているのである。現代のフランス人の言う、文化的コンテクストからこういう立場の人妻が沈黙か拒絶以外の返答をすることは考えられない、という主張は鵜呑みにできない。

フランス語原文では、文法上はロドルフの言葉ともエンマの言葉とも解釈することが可能であり、どちらかに決定しなくてはならないのは、日本語のように女言葉のある言語に訳す場合に特有の、ある意味では不幸な問題である。英語訳やドイツ語訳の場合は、フランス語原文のままに、話し手を特定する要素なく訳されている。

英語訳：

“And I shall carry away with me the remembrance of you.”

[...]

“But you will forget me; I shall pass away like a shadow.”

[...]

“Oh, no! I shall be something in your thought, in your life, shall I not?” (Marx-Aveling p.123)

ドイツ語訳：

„Drum werde ich die Erinnerung an Sie stets bewahren.“

[...]

„Doch Sie werden mich vergessen, ich bin nur ein flüchtiger Schatten.“

[...]

„O nein! sagen Sie, werde ich etwas sein in Ihren Gedanken, in Ihrem Leben?“ (Edl, p.198)

フランス語原文や、英語訳・ドイツ語訳を読む読者は、それぞれ心の中でどちらかに割り振って読んでいて、それが表面化することはほとんどないだろうから議論にもならないのだろう。日本語の読者ほどではなくても、フランス人読者とまったく同じ文化的背景を共有しているというわけではない、英語圏やドイツ語圏の読者がどう考えるのか興味深い。⁹

文化的背景や草稿を参照しないまでも、「影のように過ぎ去る」*« passer comme une ombre »*と「あなたのお心の中の、人生の中のなにがしかなる」*« quelque chose dans votre pensée, dans votre vie »*の対照を考えれば、やはりこれはロドルフの言葉と解釈するのが正しいだろう。しかし、フローベールが最初エンマとロドルフの対話として構想し、のちにロドルフのモノローグに改稿し、最後の段階で、それがロドルフの言葉であることを示す強勢形の「あなたの方は」vousを削除して、意図的であるかどうかはわからないが、エンマの返答であると解釈しうる可能性を残したとすれば、日本語翻訳者および日本人読者がここにエンマの声を聴くのも、あながち見当違いな滑稽な間違いとは言い切れないのではないだろうか。

II. 娘の名前

問題のセリフがロドルフのものであろうとエンマのものであろうと、この部分の解釈の違いによって全体の印象がそう変わるわけではない。ロドルフの誘惑に対して、エンマは反論または沈黙によって抵抗しているのである。

だが次の例では、解釈次第で登場人物の印象がかなり変わるのではないだろうか。

農業共進会の場面より前、第2部第3章で、ボヴァリー夫妻がヨンヴィルに引っ越して間もなく、エンマは赤ん坊を生む。エンマは男の子を望んでいたが、生まれたのは女の子である。エンマはイタリア風の名前、ロマン主義的な名前を考えるが：

シャルルは自分の母の名をつけたがった。エマは反対した。(生島 p.106)

ここには、成人して結婚し、親となっても母親への依存から抜け出せない、俗に言う「マ

ザコン」の男と、嫁と姑の対立が読み取れる。伊吹・村上・山田・菅野・芳川もだいたい同じように訳している¹⁰。

フランス語の原文は：

Charles désirait qu'on appelât l'enfant comme sa mère ; Emma s'y opposait. (p.172)

であり、中村と杉はもう少し原文に近い形で訳している。

シャルルの方はその児を母と同じ名にさせたがったが、それにはエンマが反対した。
(中村 p.73)

シャルルは子供が自分の母親と同じ名前で呼ばれることを希望した。エンマはそれに反対した。(杉 p.49)

さて問題は、このフランス語原文の所有形容詞 sa が誰を指すかである。フランス語の所有形容詞は、英語の his/her のように所有者の性を表さない。三人称単数の son/sa は所有者の性ではなく所有物の性を表している（上の例では「母親」*mère* が女性なので女性形となっている）。だからこれが「彼の」（つまりシャルルの）母親なのか「彼女の」（エンマではないことは明らかだから、生まれたばかりの女の子の）母親なのかは文法上判別できない。中村・杉は、原文通りどちらとも解釈できるように訳している。この文の周辺には文脈上どちらかに決定する要素は見当たらない。少し先で、姑のボヴァリー夫人は、レオンの推薦するマドレーヌという名前に対して、罪の女の名前であると反対している。この「罪の女」はエンマの将来が予見されていて、やはりここに互いに相手を否定しあっている嫁姑の対決を見るべきであろうか。

シャルルの推す名前が、自分の大事な母親の名前か、溺愛する妻の名前エンマなのか、これはフランス人にとっても、どちらの解釈も可能であるらしい。文化的背景という点からいえば、21世紀の現在、娘に母親の名前を付ける習慣はないが、祖母の名をもらうことは普通に行われていることだ、という。現代のフランスではそうかもしれないが、しかし我々は、『椿姫』の著者アレクサンドル・デュマが『三銃士』を書いた父親と同じ名前であり、ギュスタヴ・フローベールの兄が父親と同じアシルという名を持ち、妹カロリーヌの

娘（ギュスタヴの姪）がやはりカロリーヌと呼ばれていることを知っている。エンマ・ボヴァリーの夫シャルルの父の名はシャルル・ドニ・バルトロメ・ボヴァリーである。現代では失われてしまったかもしれないが、娘に母と同じ名をつけるという習慣が、少なくとも19世紀のフランスにあったことは確かである。

所有形容詞の所有者の性「彼の」と「彼女の」を区別する言語、英語圏やドイツ語圏ではこの部分をどう訳しているのだろうか。ある英語訳では以下のように訳している。

Charles wanted the child to be called after her mother; Emma opposed this. (p.75)

英語訳者は「彼女の母」« her mother », つまり生まれたばかりの女の子の母親、すなわちエンマのことと解釈している。ドイツ語も、英語と同様、所有者の性を区別するが、「子供」Kindは中性名詞で、所有者が中性の所有形容詞は所有者が男性の所有形容詞と同じseinなので、ドイツ語訳ではシャルル（男性）の母のことなのか、子供（中性）の母のことなのか判別できない。どちらとも解釈できるようである。逆に言えば、英語や日本語と違って、フランス語原文の曖昧さをそのまま訳すことができる。

Charles wünschte sich, das Kind möge so heißen wie seine Mutter; Emma war dagegen. (p.123)

フローベールは、この部分の全部で4稿ある草稿の最初の稿の中で、シャルルの推す名前をはっきりと書いている。

シャルルは、彼女がその母親と同じくエンマと呼ばれるべきだという意見だったが、後者はそれを嫌がった。¹¹

次の稿（2-fo106）からは子供の名としてのエンマという固有名詞は書かれませんが、母親であるエンマ自身がそれをいやがる理由（「〈あまりに〉平凡」）が付け加えられ、この部分は第3稿目の欄外で、以下のように書かれる。

〈しかし後者〉エンマは、自分の名はあまりに平凡で、俗っぽいと言って、それを望まなかった。¹²

草稿のこの段階では、姑のボヴァリー老夫人はまったく問題にはなっておらず、シャルル

は、少なくともこの場面では母親のことなどは考えず、妻のことしか考えていないのである。

作者の決定稿である出版された小説を、「母思いの息子シャルル」ではなく「(母親をないがしろにしてまで) 妻を溺愛する夫」という観点から、もう少し広い文脈で読みなおしてみよう。

確かにシャルルは、試験に失敗した時も開業するときも最初の結婚も母親に任せ、金銭問題が深刻になったときや、レオンが旅立った後でエンマが鬱状態になったときなど母に頼っている。¹³ 母親の方も、夫と喧嘩すると息子のところに逃げ込み、先妻のデュビュック夫人ともエンマともいがみ合っている。¹⁴ 典型的な母から独立できない息子と子離れできない母親の図を読み取ることもできるかもしれない。

だがエンマと出会ったことでシャルルと母親の関係は変化する。ボヴァリー老夫人はもはや結婚式の采配をふるえず不満をかこっている。¹⁵ 嫁姑の関係も、彼女自身が選んだ最初の嫁デュビュック未亡人の時代とはちがうのである

デュビュック夫人の頃は、ボヴァリー老夫人はまだ自分の方が好かれていると感じていた。だが今は、シャルルのエンマへの愛は、自分への愛情に対する変節か、自分に所属するものへの侵害であるかのように思われた。そして彼女は息子の幸せを、悲しげに黙って眺めていた。まるで破産した人が以前住んでいた家で他人がテーブルについているのを窓越しにのぞいているかのように。母は息子に、思い出話の形で、自分の苦労や犠牲を思い出させ、それをエンマのほったらかししようと比べて、嫁ばかりそんにかわいがるのは理不尽だ、と言うのだった。¹⁶

委任状の問題で揉めたときもシャルルはエンマの肩を持つが、姑は嫁への委任状を破棄させ、エンマが発作を起こすので、この時シャルルは「生まれて初めて母に反抗して」妻を弁護し、母は怒って出ていく。¹⁷ エンマの死後も遺品を巡って母と息子のあいだに何度かいさかいがあり、シャルルは「『彼女』のものだった家具類はどんな小さなものでも絶対に売却を承諾」せず、母は再び家を飛び出す。¹⁸

エンマと出会って変身した後のシャルルが、二人の「愛の結晶」である娘に最愛の妻の名を与えたいと願うのはごく自然なことに思える。

他方シャルルが提案する名前に対するエンマの拒絶についても読み直してみよう。エンマは、出産の前には男の子を望んでいた、とある。

その子は丈夫で黒髪で、ジョルジュという名にしよう。男の子供を持つと考えると、これまで自分にはできなかったあれこれがこの先報われるような気がした。男なら、少なくとも自由である。好きなことができるし国々を駆け巡り、障害を乗り越え、手の届きそうもない幸福もとらえることができる。しかし女はいつも縛られている。無力で従順で、肌の柔らかさと法の呪縛に邪魔される。女の意志など、かぶっている帽子にリボンで留められたヴェールのようなもので、風のまにまになびくだけだ。何かしらの欲求に引っ張られても、いつも世間体が引き留める。¹⁹

エンマはこの時点では、いささか身勝手な、まだ漠然とした不遇感を抱いており、生まれる子供に自分のものとは別の人生を期待し、かなわなかった自分の夢を託そうとしている。男の子であれば理想的だが、その夢もかなわず、しかし、たとえ女の子であっても自分と同じ人生を歩んでほしくはない。だからシャルルの提案するエンマという名前を厭うのである。一方シャルルにとっては、同じ名が、夫に愛され生活に不自由なく暮らしている幸せな女の代名詞であり、娘にも母と同様の幸せを願うのである。

この命名をめぐる夫婦間の齟齬は、小説全体を通じて現れる主要なテーマのひとつである。シャルルを視点とする物語は、若く美しい妻を迎えた時点で、まるでおとぎ話の結論「そして二人はいつまでも幸せに暮らしました」のように終わる。そこからエンマの倦怠と不幸の物語が始まるのである。

第2部第5章、レオンの愛に気づきながらも、自虐的に貞淑な妻を装って退けるが、その恨みは夫シャルルに、そして特に妻の幸福を確信している点に向かう。

腹立たしいのはシャルルが、彼女が苦しんでいるということなど、疑ってもみない様子をしていることだ。自分が彼女を幸せにしていると確信していて、それは彼女にとってはばかげた侮辱であり、その安心しきった様子は恩知らずに思われた。いったい誰のために彼女は慎ましく貞淑にしているというのか。彼こそが、すべての幸福への障害物で、すべての不幸の原因ではないか。まるで四方八方から彼女を締め付けている錯綜した革帯の留め金のような。²⁰

シャルルの方はその後も、エンマがロドルフやパリから戻ってきたレオンと関係し、いつときの幸せを味わった後にさらに深い絶望に陥ったことにも気づかず、エンマがついに服毒するまで、彼女が幸福であると信じている。以下が夫婦間のほとんど最後の会話となる。

「お前、幸せじゃなかったのか？おれのせいなのか？でも、おれはできることはなんでもしたんだよ」

「そうね…そのとおりね…あなたはいい人よ。」²¹

娘の命名の場面は、小説の第2部、ボヴァリー夫妻がヨンヴィルに引っ越し、物語が新しい舞台に移ってすぐのエピソードである。第2部第1の宿屋の場面が続いて人物紹介的な性格を持つ挿話で、主要登場人物がそれぞれの子供の命名法を通じて、いわば自前の幸福論を提示している。エンマは自分のあこがれを表す名前（イタリアやロマン主義）を考え、若いレオンは流行の名を好み、堅物のうるさいお姑さんは罪びとの名を厭う。名誉を夢見る薬剤師オメーは自分の子供たちに偉人の名をつける。

エンマは結局、ヴォービエサールの舞踏会で見かけた令嬢のひとりにちなんで、娘をベルトと名付ける。娘は出自に似合わない貴族的な名前を負わされるのである。自分の現状に決して満足せず、絶えず身の丈に合わない幸せを恋焦がれる妻と、そういうあこがれをまったく理解せず、おのれのささやかな幸せに満ち足りて、妻もまた同じであると確信してかえってエンマを苦しめる、善良で単純な男。ありきたりの嫁と姑の対立や、小説の初めの部分に現れる母親から独立できない男のイメージよりも、この命名の場面には小説全体に関わるエンマとシャルルの関係の縮図を読み取る方がよいのではないだろうか。

おわりに

優れた文学作品は多様な解釈を許容する。複数の解釈の可能性は、（意識的なものではなくても）それも作家の選択である。フローベールの草稿を読んでいると、説明的な部分を徹底的に削除して文を単純化し、あえて解釈の多様性を残して出版したように思われる部分も少なくない。読者はそれぞれの経験や文化的背景を基に、それぞれの解釈をし、どんな読み方をしようと、結局のところは読者の自由である。作者が決定稿として採用しなかった部分を掘り返して、「この読み方が正しい」などと押し付けるのは論外であろう。

翻訳で読む場合は、読者は翻訳者の解釈というフィルターを通じて読むことになる。完璧に忠実な翻訳というものは現実には不可能で、翻訳者も言語の制約や文化的背景に囚われたひとつの解釈を読者に提示する。読者はそれを承知の上で読んでいるはずである。しかし、上に挙げた二つの例のように、複数の翻訳者が一致して、多様な解釈の可能性のうちの一つを選択している場合（恐らく、逡巡して先行の翻訳を参照し継承するのだろう）、日本人読者は長年『ボヴァリー夫人』について、選択の余地なく、ロドルフの誘惑に対し

て謙遜（あるいは一種の媚態）で答えるエンマ、「マザコン」のシャルル、といった我が国固有のイメージを抱いてきた。

命名の場面のドイツ語訳や杉訳・中村訳のように、原文の曖昧さをそのまま尊重して翻訳できる場合はそれに越したことはないが、同場面の英訳や共進会場面の日本語訳のように、翻訳言語の性質上、どちらかに決定しなければ訳せない場合、翻訳者としては、あえて先行の訳とは別の可能性を提案してみるのもひとつの見識であろう。また、草稿を見て作者の最初の意図がわかるのであれば、そして特にフローベールのように草稿資料の整理が進んでいてインターネットで手軽にオリジナル原稿の写真や転記が閲覧できる場合は、作者の初めの意図を確認する労をとってもよいのではないだろうか。

註

- 1 « Comment traduire en japonais les styles indirect et indirect libre de *Madame Bovary* » *Flaubert Revue critique et génétique*, juin 2011, « Flaubert et la traduction », ITEM, <https://flaubert.revues.org/1541>
- 2 « Histoire de la traduction des œuvres de Flaubert au Japon », Tomoko MIHARA, Centre Flaubert CÉDÉdI, <http://flaubert.univ-rouen.fr/etranger/japon.php>
- 3 引用するときは翻訳者の苗字とページ数のみ記す。敬称は略させていただきます。翻訳者名のないときは拙訳。カッコ […] 内は初版の年。フランス語やドイツ語の解釈について、Gilles Delmaire, Georges Conreur, Lydia 清田, Randolph Gramlich 諸氏に貴重なご教示をいただきました。
- 4 Gustave Flaubert, *Madame Bovary*, préface, notes et dossiers par Jacques Neefs, « Le Livre de poche classique », 1999, pp.248-249. 以下『ボヴァリー夫人』のフランス語原文はページ数のみ記す。下線は筆者による。以下同様。
- 5 「でもいまにお忘れになりますわ。私なんか影のように過ぎ去ってしまいますわ。」(伊吹上 p.184)、「でもあたしのことなどお忘れになりますわ。あたしなんか影のように消えてしまいますわ」(村上 p.197)、「でもあなたは私をお忘れになりますわ。私なんか影のように過ぎてしましましょう。」(杉 p.81)、「でもあたくしのことなどお忘れになりますわよ、あたくしなど影のように通り過ぎてしまうでしょうに」(菅野 p.136)
- 6 「けれどもあなたはわたしをお忘れになるでせう、わたしは影のように消えてしまふでせう。」(中村 p.126)、「でもあなたは私のことなど忘れてしまわれるでしょう、私などはふと通り過ぎた影のようなものでしょう」(山田 p.235)
- 7 Loïc Windel 氏の指摘による。3-fos184, 178, 180。『ボヴァリー夫人』の草稿は、ルーアン大学のサイト « Édition des manuscrits de *Madame Bovary* de Flaubert / Transcriptions / Classement génétique » <http://www.bovary.fr/> を参照した。以下、引用するときは 6 巻まである巻数とフォリオ番号を記す。フランス語原文も日本語訳も、加筆部分は〈…〉で、削除部分は消し線で表す。
- 8 3-fos168v, 194v。表彰式の部分は省略し、話し手が交代する箇所では省略記号 […] も省く。
- 9 この部分の周辺数ページのみ読んでいただいた Gramlich 氏はロドルフの言葉と解釈した。
- 10 「シャルルは自分の母親の名前をもらってつけたがった。エンマは反対であった。」(伊吹上 p.109)、「シャルルは自分の母の名をつけたがった。エンマはそれに反対した。」(村上 p.115)、「シャルルは自分の母親の名前をつけたがったが、エンマは反対した。」(山田 p.139)、「シャルルは自分の母親と同じ名

- をつけることを望んだ。エンマはそれに反対した。」（菅野 p.86）、「シャルルは自分の母親と同じ名前をつけたかったが、エンマはこれに反対した。」（芳川 p.158）
- 11 « Charles était pr qu'on l'appelât <pr qu'elle fût appelée> Emma comme sa mère, mais celle-ci le détestait. » (2, fo105) ちなみにこの草稿では、この部分の前に「ボヴァリーの母親も、若かりし頃には少しは詩心もあってギターを習ったりもしたので、子供を〈クレマンヌ、イゾール〉オランプと呼ぶという意見だった」という文がある。
- 12 « <Mais celle-ci> Emma n'en voulût pas de son nom qu'elle trouvait trop commun, vulgaire. » (2, fo198v)
- 13 第2部第7章 p.219；第3部第6章 pp.408-410 第3部第11章 p.497。
- 14 第1部第2章 p.77、第2部第12章 p.302、第3部14章 p.332。
- 15 第1部第4章 p.90。
- 16 « Du temps de madame Dubuc, la vieille femme se sentait encore la préférée ; mais, à présent, l'amour de Charles pour Emma lui semblait une désertion de sa tendresse, un envahissement sur ce qui lui appartenait ; et elle observait le bonheur de son fils avec un silence triste, comme quelqu'un de ruiné qui regarde, à travers les carreaux, des gens attablés dans son ancienne maison. Elle lui rappelait, en manière de souvenirs, ses peines et ses sacrifices, et, les comparant aux négligences d'Emma, concluait qu'il n'était point raisonnable de l'adorer d'une façon si exclusive. » (p.109)
- 17 第3部第6章 p.408-411。
- 18 « [...] car jamais il ne voulut consentir à laisser vendre le moindre des meubles qui *lui* avaient appartenu. Sa mère en fut exaspérée. Il s'indigna plus fort qu'elle. Il avait changé tout à fait. Elle abandonna la maison. » (p.491)
- 19 « [...] il serait fort et brun, elle l'appellerait Georges ; et cette idée d'avoir pour enfant un mâle était comme la revanche en espoir de toutes ses impuissances passées. Un homme, au moins, est libre ; il peut parcourir les passions et les pays, traverser les obstacles, mordre aux bonheurs les plus lointains. Mais une femme est empêchée continuellement. Inerte et flexible à la fois, elle a contre elle les mollesses de la chair avec les dépendances de la loi. Sa volonté, comme la voile de son chapeau retenu par un cordon, palpite à tous les vents ; il y a toujours quelque désir qui entraîne, quelque convenance qui retient. » (p.172)
- 20 « Ce qui l'exaspérait, c'est que Charles n'avait pas l'air de se douter de son supplice. La conviction où il était de la rendre heureuse lui semblait une insulte imbécile, et sa sécurité là-dessus de l'ingratitude. Pour qui donc était-elle sage ? N'était-il pas, lui, l'obstacle à toute félicité, la cause de toute misère, et comme l'ardillon pointu de cette courroie complexe qui la bouclait de tous côtés ? » (p.197)
- 21 « — N'étais-tu pas heureuse ? Est-ce ma faute ? J'ai fait tout ce que j'ai pu pourtant !
— Oui..., c'est vrai..., tu es bon, toi ! » (p.462)